

## 1. 研究目的

伝統工芸の復興および、工芸技術の伝承と発展の方法の提案を目的とする。

## 2. 調査結果

- 日本の伝統工芸品産業は徐々に縮小している
- 伝統工芸の企業数及び従業員数は減少している  
原因は生活の洋風化、安い輸入品増加、後継者問題、素材減少、若者の興味低下など。
- デザインのアプローチによって伝統工芸品を現代的製品に作り替える試みは先例がある  
曲げわっぱの照明などのトライがあるが、成功しているものが多いとは言いがたい。

## 3. コンセプトおよびアイデア展開

- 現代人に合った製品  
伝統工芸品の多くは現在の日常生活から乖離しているように思われる。その点、椅子は現代における日用品であると考えられる。
- 伝統工芸技術の複合化  
一種類の伝統的な技術を現代的な形で復興させるのは困難も多いようだ。そこで複数の伝統工芸を複合させることで新たな可能性を導き出せるのではないか。

以上から本研究では、次に挙げる二種類の伝統工芸を組み合わせることで、伝統的な技術が活かされた椅子の提案を行うこととした。



図1 別府竹細工

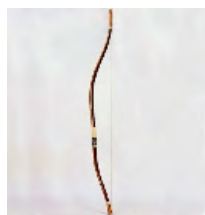


図2 都城大弓

大分の別府竹細工について(図1)

室町時代に行商用の籠として始まり、江戸時代には別府温泉の客が滞在中に使う台所用品が作られた。これらが土産物として持ち帰られるようになるにつれ、竹細工がたくさん作られるようになり、別府周辺の地場産業となった。

宮崎の都城大弓について(図2)

鹿児島成(なり)の流れをくむ大弓で、江戸時代

後期には盛んに作られていた。明治時代に入り、川内地区から来住した楠見親子が多くの弓作りの職人を養成した。豊富な原材料に恵まれたこともあって、昭和初期には、東アジアにまで製品が売られるような大産地となった。

## 4. 最終提案

本提案では本物の伝統工芸技術の再現は現実的に困難なため、形状を模した表現で試作を行った。(図3)

- 座面は別府竹細工を想定した  
細かい竹編み細工の座面を想定している。本物であっても強度的に僅かな補強が必要と思われるが、今回はダミーのため合板のベースを補強材として用いた。
- 脚部は都城大弓を想定した  
弓に用いられるような竹のしなりと強度を活かした足の構造とする。今回は竹のみで強度のある再現が出来なかったため、合板で強度部品となるベースを作り、そこに竹を貼り付けることで形状を想定したダミー表現とした。



図3 試作品

## 5. 今後の発展

長い時間をかけて成立した伝統工芸の世界は、あまり大きな変化を望んでいないように思われる。実際のところ、複数の伝統工芸技術を組み合わせるには多くの困難が伴うだろう。そこで、全国に散らばる伝統工芸技術者やその組合を横断的につなぎ、新たな工芸品を模索していく組織作り、仕組み作りが必要では無いだろうか。

本提案が、日本の伝統工芸衰退に対抗した考えの1つになる事を望んでいる。

## 文献

ニッポンのワザ.com 伝統工芸の現状  
伝統工芸青山スクエア 別府竹細工 都城大弓